

釧路湿原自然再生協議会 再生普及小委員会
第20回湿原学習のための学校支援ワーキンググループ議事要旨

■日時：2025年2月26日（水）15:30～17:00

■場所：釧路地方合同庁舎4階 第3会議室（オンライン併用）

■出席者：（敬称略・順不同）

<専門家>

- ・高橋 忠一（再生普及小委員会委員長）
- ・境 智洋（北海道教育大学釧路校 教授）

<学校教員>

- ・釧路市立中央小学校 前田 進太郎
- ・釧路市立新陽小学校 柴田 康吉（オンライン参加）
- ・釧路町立富原小学校 橘 一利（オンライン参加）
- ・標茶町立標茶小学校 湯浅 憲二（オンライン参加）
- ・鶴居村立幌呂中学校 長谷 泰昌

<学校教育行政機関等>

- ・北海道教育庁釧路教育局 教育支援課 社会教育指導班 主査 角田 淳
- ・釧路町教育委員会 教育部 指導主事室 室長 坪井 条太（オンライン参加）
- ・釧路湿原国立公園連絡協議会 事務局次長 元岡 直子
事務員 森 百合恵（オンライン参加）
（兼務 釧路市環境保全課自然保護係/釧路国際ウェットランドセンター事務局）
- ・釧路市子ども遊学館 事務局長 小笠原 忍、学習担当リーダー 古野 峻也

<ワーキンググループ事務局>

- ・環境省北海道地方環境事務所 釧路自然環境事務所 境 耕平、石下 亜衣紗
- ・公益財団法人北海道環境財団 山本 泰志、松本 真由

■議事次第：

1. 開会
2. これまでの取組みについて
3. 湿原学習の普及にむけて
4. その他
5. 閉会

■議事概要

1. 開会

《配布資料確認》

2. これまでの取組みについて

事務局より資料1について、参考資料1から4も参照し説明。資料1に記載した各取組みの写真、評価データ、グラフ等をプロジェクターで映写し説明（オンラインでは画面共有）。

- ・釧路湿原自然再生事業再生普及行動計画（以下、行動計画）を5年毎に自己評価しており、学校支援WGは、行動計画7ページ、3-1「②湿原と地域に学ぶ～学校や地域での学びの幅を広げる～」に沿って、取組みを企画し実行してきたということになる。期待される成果についてA評価が3つB評価が1つで、コロナ禍にも関わらず様々な工夫をしながら取組みを進めたということで、総合評価はA評価としている。
- ・いろんな人や機関を繋げてくれたことが一番大きかった。湿原学習以外でも恐らく利用できることもあると思う。ネットワークを広げてくれた事は大きな財産になった。
- ・学校側では頑張りきれないところをサポートしてもらえた事はとても良かった。例えば高校の探究などでも活用される可能性が今後上がっていくのではないかと思う。
- ・中学と高校が繋がれば、場合によっては大学まで繋がる。その過程で施設への活動と繋がる。これは結構できたのではないかと個人的には感じている。
- ・遊学館としても、我々がお客さんに伝えるだけではなく、子どもたちに伝えてもらうという新しい活用の仕方を見出すことができ、職員も湿原に携われる機会を得ることができた。湿原という形でも連携という形でもどちらにも得られたものは多かった。
- ・事業の中で、遊学館で地域のことを伝える機会はそう多くはない。その中で釧路のことを伝えられている事業としてお客さんに提供できたことはとても良い機会となった。
- ・場所を提供していただけるだけでも大変大きな成果になった。おかげでこういう形の評価を行うことができた。
- ・成果が上がってきたというのは連携が出来たということと、様々な活動が繋がってきたということだと思う。一方で、取り組む学校がもっと増えても良かったと思う。今、知識伝達から地域課題を解決する形に教育の流れが変わってきている。探究的な力をつけていく中で湿原という素材がとても効果があるということがわかってきた。探究的な力をつけるためには、もっと湿原を活用できるように、もっと学校が取り組めると良いということが見えてきた。その中であまり学校が増えてこなかったことが課題と思う。
- ・遊学館での発表に伺ったが、問題を見つけて解決しようとする姿勢は小学生、中学生関係なしに、大学生と何一つ変わらないと思う。本質的なところは何一つ変わっていない。それを改めて発見し驚いた。
- ・子どもたちが実際に触れて学んでいく中で、教科学習では得られないような、実感を伴うこと、自然へ向ける眼差し、知識、文字だけでは伝わらない部分を感じる事が大切だと思う。湿原という様々な価値判断はあるが、地元民としての気持ち、愛着の部分で言葉や教科書では伝えきれない部分を子どもたちが沢山体験できたと思う。そういった機会を沢山与えていただいたのと同時に、社会教育も含めていろんな関係施設と繋がることができ、子ども達も湿原を守っていたり、発展させていたり、子ども達に関わるいろんな人たちがいるんだという、その繋がりを知れたということが活動の価値ある部分と思っている。
- ・本日、湿原学習の発表会で4年生が発表させていただいた。湿原学習で不思議に思ったことを探究的に調べ続け発表していた様子があった。非常に興味深いものだったり、自分も知らないことが沢山そこにはあり、保護者も感心して見ていた。湿原の面白さに改めて気づいたといった新たな発見というところと、学び方というところで子どもたちがさらに今後5年生

6年生になっていくにしたがって身につけたいところが学習できたのかなと思っていた。子どもたちの学習の姿から、この取り組み、学習に関わらせていただいたことは、非常に大きなものがあったということを感じさせていただいた。

- ありがたいと思うのは、繋がりであったり、体験学習、自分たちでやっていくというところで、教師が準備していくとなるとかなり難しいところもあると思う。子どもたちも外部の人たちに実際教わることで、すごく生き生きと学んでいたと思う。内容的にどこまで深められたかなというところに課題が残ってはいるが、子どもたちが自分それぞれの課題を発見して、それを探究していくというところでは、価値のあるものかなと思っている。
- 各小学校を訪問させていただき、発表会の際にはコメントをしたり、また、提供できる情報をお話させていただく機会をいただいた。発表の形態に慣れていない子どもたちもいる中で、どの様に整理していったら良いか、客観的にみるとこう思うといったことを伝え、それに基づいてブラッシュアップして最後の成果に繋げていた。校内の発表から始まって、保護者に伝え、それから外の人に聞いてもらうということが、時数の制限はあるだろうが、大事なことだと思う。学校支援WGの中で行ってきた取組みをきちっと整理され、評価をまとめられたということは素晴らしいことだと思っている。今後もぜひ続けていっていただければと思っている。
- 第4期の計画ということで、活動、取り組みも重層的に手厚く行われていると思う。毎年学習させていただいているおかげもあり、学校の中に定着してきているのかなと見ている。課題としては、取り組みの意義や価値をどうやって受け継ぎ引き継いでいけるかというところ。外部の方に支えてもらう、伝えてもらうということも非常に大事で、これらも子どもたちの学びに繋がっていくと思っている。今後ともよろしくお願ひしたい。
- 前回の学校支援WGでは、国の行政機関からの働きかけと、教育委員会など地域の行政機関との役割分担の話も出ていた。これから様々な形で相談して依頼したり、役割分担について話し合ったりすることが起こるかもしれない。どうかよろしくお願ひしたい。
きちんとした批判や問題提起があり、それに対して子どもたちが達成感を持つ、褒められる、場合によっては景品をもらえるなど、そういうことが学習の過程の中で案外大事なのかなと思ひながら見ていたが、どう考えたらよいか。
- 発表に対して我々大人が適切な助言をしてあげることは、とても大事なことだと思う。そういう場合は、これまでは学校の中で閉じていたが、それを広げて、遊学館で出来るようになったことは、とても意味がある。昔、夏休みの自由研究などでは市町村ごとによく発表会を行い、結果を公表していたが、先生方の負担が大きい、町の負担が大きいということで廃れていった。しかし、他県では現在も行っているところもある。そういう意味で、釧路という場所で湿原を題材にしてやり始めたということはとても意味がある。子どもたちの探究の力をつけるためには、今後こういう取り組みがとても大事なことであるし、題材があるということがすごく大きなこと。そして、題材が多様に広がることができると考えると湿原というのはとても意味がある。そしてそれを調べる環境があり、それを発表する場所がある。そこまで一連の流れが出来たということは大きい。これを今後広げていくことができれば良い。
- 学習をコーディネートする先生は、釧路湿原の専門家ではないので、本質的な批判や指導を行うことは難しい。今、釧路湿原に関して沢山の専門的な活動をしている人、専門的な知識を持っている人達がいて、そういう人たちに学校やフィールドに来てもらって、より深いことを子どもたちに向かって真面目に話してくれる。そういうことが起こることによって、子どもたちの中で何か変化が起こるということを期待したい。そういったことを遊学館での子どもたちの話を聞きながら考えていた。良いきっかけになると良いなと思っている。

3. 湿原学習の普及にむけて

- ・次の議事は、湿原学習の普及に向けてということになる。この学校支援 WG がどういう形が変わるのかわからないが、とりあえず私達のこのような形での WG はこれが最後ということになる。
- ・資料 2、参考資料 5 について、資料 2 各項目の要点をとりまとめたスライドをプロジェクターで映写し説明。(オンラインでは画面共有)
- ・釧路国際ウェットランドセンターにおける令和 6 年度の取組み、令和 7 年度の取組み予定について、資料に基づき説明。
- ・「湿原・水学習」教育支援システム(案)について、資料に基づき説明。釧路湿原・水学習と書いたが、小学校の 3 年生、4 年生では水を扱っているのも、水を含めると湿原に向かうための学習をしていくことができると思う。4 月 5 月の段階で、各学校が年間計画を立てる時に、この様に集まる機会があれば良い。これまで行ってきた機会をもう少し拡大し、将来的にこういうことができれば良いと考えた。学校側の要望、様々な環境の機関が支援できる内容を共有し、互いにマッチングする場所が必要であろう。それを今後どこかで作りながら、できればもっと拡大できるのではないかと。対面でなくとも、オンラインであっても、お互いに共有し合うことができれば、もっと進行をうまく進めるのではないかと。次のステップに上げるために良い案がないかということで提案した。
- ・道や市町村の様々な機関がいろいろな形で関心を持っているので、重なるところ、協力し合えるところも多くあると思う。他の機関で行っている内容、知識の共有が、もっと必要かもしれない。国の行政、教育委員会、様な活動団体が協力し合ったり、役割分担し合うことによって能率的なことができる気もする。
- ・環境省としても、令和 7 年度以降も湿原学習の普及の取組みを引き続き支援していく考え。学校、地域、専門家を繋ぐコーディネート機能は、各機関との分担、連携を考えていきたい。学校の現場が自発的に取り組む事例が増えていくように、それを応援できるように、これまで蓄積した情報を活用しつつ、専門家や必要な機関と繋いでいけるような形を想定しながら来年度以降の体制を再構築したいと考えている。
- ・子どもたちは湿原に来ると目をキラキラさせて生き物を見てくれる。学習過程や発表を見せていただくことで、対応する側もステップアップできる。インターネットで調べるより、図鑑や現地の人に聞いた方が良いといった結論を出している子もおり、それだけでも成果があったと思う。
- ・五感の働きを生で体験させることは非常に重要。そういう場所を持っているということは大きなアドバンテージだと思う。何とかそれをもっと使いたいと思う。釧路湿原に限定するのではなく、水という大きな枠の中で発想を転換して捉えれば、より広がり自由に教育の中に取り込めるように思う。資料 2 の内容がこれからの活動のためのヒントになっていけば良いと思う。後ほど目を通していただきたい。
- ・17 年前から解決されていない課題も多くある一方で、湿原学習に限らず、学校と外部との連携の気運はこの 17 年でかなり変わってきた。この学校支援 WG の取組みも、そうした流れの中にあるものと感じている。
- ・第 3 期の行動計画が始まった 2015 年から、学校支援 WG と名前を変えて学校の先生方、教育委員会の方、地域の中で様々な形で活動している人たちに声をかけて参加をしていただいていた。釧路市こども遊学館とは良い形で連携させていただいているが、取組み当初からお声かけすべきであった。考え方によっては、いくらでも協力し合える余地が最初からあったのではないかと感じている。他にも地域の中で協力し合える団体があるかもしれない。協力し合うことで補いながら、新たな学校教育への働きかけの仕方を考えていただきたい、考えていくと良いと思っている。
- ・3 月 9 日に釧路湿原サイエンスフェア口頭発表会が行われる。一般の方への発表を心配され

る先生、お子さん、保護者もいらっしゃると思うが、そもそも湿原に行ったことがある大人が少なく、気負うことなく発表してもらいたい。何よりも発表した子たちの身になるものだと思うっており、詳しい人に聞いてもらった、質問や助言をしてもらったことが、とても良かったというアンケート結果も得られている。子ども達の背中を押してほしい。

- ・今まで事務局に様々な支援をしていただいていたが、これまで通りにはいかなくなってしまうことは、やはり心配ではある。学校がどういった成果を出せば環境省としても取組みが評価につながるのか、Win-Win となる関係がもう少し見えると、持続性が高まるのではと思っていた。
- ・自分の学校では現段階で来年度の湿原学習は 5 年生が行うことは決定しており、バスの確保や訪問先での対応の予約も既に行って動いている。学校としては前年度に動き出さないと動けないので、そういった学校が増えていかないと厳しいと思う。次年度のことは前年度に動いている。動く学校が増えれば良いなといった感想を持っている。
- ・学校支援 WG で先生方に情報提供いただくことで、学校のスケジュールなども把握できるようになった。それまでは協議会や小委員会の集まりの中で、それも知らなかった。そういう意味でも 3 歩ぐらい進んだと感じる。もっとこういった形で連携ができるようにしたいと思う。長い期間、いろんな形でお集まりいただき、貴重なご意見を発言していただき、御礼申し上げます。これを基にして環境省でも、より有効なプランを考えていただけるように働きかけていただければと思う。

4. その他

5. 閉会